

作物名：ばら

病害虫名：根腐病（病原：*Pythium helicoides*）



発病株（左手前、定植1か月後）



葉の黄化、枯死



暗褐色に腐敗した根

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・根を侵す。
- ・定植してから30cmくらいから折り曲げをする時期に根が腐り、下葉が黄化して枯れる。
- ・根は暗褐色に腐敗し、細根は腐敗して脱落しやすくなる。
- ・土耕栽培では発生しないが、ロックウール栽培等の養液栽培で発生がみられる。
- ・罹病根の土を落としてから根の表面を流水でやさしく洗浄したのち、水中に1～3日程度静置し、水浸状に腐敗した根を顕微鏡で観察すると乳頭突起を有する卵型～楕円形の胞子のうが確認できる。



根腐病菌の胞子のう

2 伝染源及び伝染方法

- ・本病菌は原水や周辺土壌からの土ぼこりなどで菌がベッド内に持ち込まれ発病する。
- ・本病が発生した施設では、被害株残渣及び培地内に伸長した根に感染していた菌が翌年の伝染源となる。
- ・遊走子によって水媒伝染する。

3 発病・伝染好適条件

- ・本病菌は卵菌類に属し、無性器官として菌糸、胞子のう、厚壁胞子を形成し、有性器官として造卵器、造精器、卵胞子を形成する。
- ・菌糸の生育最適温度は30～35℃だが、遊走子の形成適温は20℃前後のため、養液温度が25℃を超えると一気に感染が拡大し、培地温度が30～35℃になると被害が激化する。そのため7～9月の高温期に発生が多くなる。
- ・培地温度が20℃以下になると発生がみられなくなる。

4 防除対策

- ・定植前には資材を消毒する。
- ・発病株は見つけ次第、速やかに抜き取り処分する。
- ・水分過多で多発しやすいので、ベンチ内に滞水を生じないように、ベンチの水平調整に留意する。
- ・多肥栽培は発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。

5 出典

- (1) 参考文献：花き病害図鑑（農研機構花き研究所）、渡辺：植物防疫 62(11):597-600;2008、渡辺：植物防疫特別創刊 15:68-70;2012、養液栽培における高温性水媒伝染病害の安全性診断マニュアル（岐阜大学他）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影